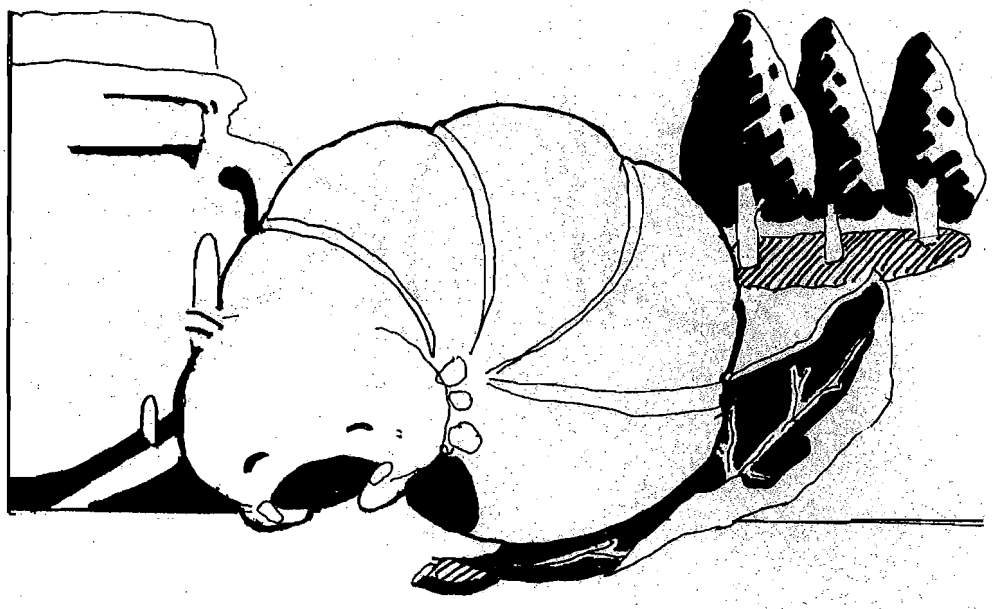


【表紙絵】

チョウになれない イモ虫の歌

マジカルーマーマレードの森の中、僕は、住んでいるんです。
マジカルータイムの光の中に僕の夢は あるんです。
なんでも叶う その時こそ、僕の身体が破裂して すてきな羽が 現れて、黄金色の空に舞あがる。
眠りにつく前に 神様に、どれほど僕は、お願いしたことでしょう。
次の朝が そのマジカルータイムであることを！
神様は こんなちっぽけなイモ虫の 願いに耳をかたむけるほど、おひまじゃないんでしょうね。
僕は いつの朝だって このふとっちょで のろまなイモ虫のままで目がさめるんですから。
なにがつまっているんでしょうね、この大きな身体の中に、．．．
僕は 最近 気がつきました。
僕の身体につまっているのは 夢なんだって。
大きな、大きな 夢なんだ。
そして、大きすぎる夢は 叶えられるのに たっぷりの時間がかかるんです。
僕は いつまでも待っています。
待つことが 今の僕なんです。
グランーマーマレードの「明日を思うことの幸せマーマレード」を食べながらね。

作者：鈴木純子（本名：金内純子）
神戸市生まれ。京都私立芸術大学西洋画科を卒業後、絵本に興味を持ち、講談社絵本新人賞、小学館童画新人大賞などに応募し、入選を重ねる。1985年第1回大阪国際児童文学館ニッサン童話と絵本のグランプリで絵本優秀賞を授賞、1989年『サンタクロースのさいごのプレゼント』か第5回の同グランプリで絵本大賞を獲得した。
現在は絵本及び雑誌のイラスト、キャラクター制作などの仕事をしている。
住所：大阪府枚方市上島町6-1-603

目次

【表紙絵】チョウになれないイモ虫の歌
目次／FLANKERデザイン一新 ----1
シンポジウム報告　《今、アクティブに！　ノーマライゼーションへの道》 ----2
PROP PRESS ----8
いよいよ、プロップ・ステーション！ ----11
障害者向けコンピューター教育セミナー
　プロップ・コンピューターセミナーPHASE2の内容 ----12
応援してます！私たち！！ ----16
REPORT!　今、障害者雇用に取り組む企業　株式会社イトーキ ----20
人クローズアップ！5　中橋　紀子さん ----24
幕張MACWORLD EXPOレポート ----26
データショウ"92　アクセシビリティ関連機器のご案内　Ⅱ ----29
ボラ協周辺食べ歩きMAP ----32
「我羅門のネットワーク通信　よもやま話 vol.1 No.1」 ----34
パソコン体験談４ ----36
《この本は絶対読んで！５》 ----38
お知らせ ----39

FLANKER　デザイン一新

この４月からプロップ・ステーション設立準備委員会が，正式にプロップ・ステーションとして設立されました。また、機関紙FLANKERも創刊から丸一年を迎えたこともあり、新たなスタートの節目として、FLANKERのデザインを一新することになりました。

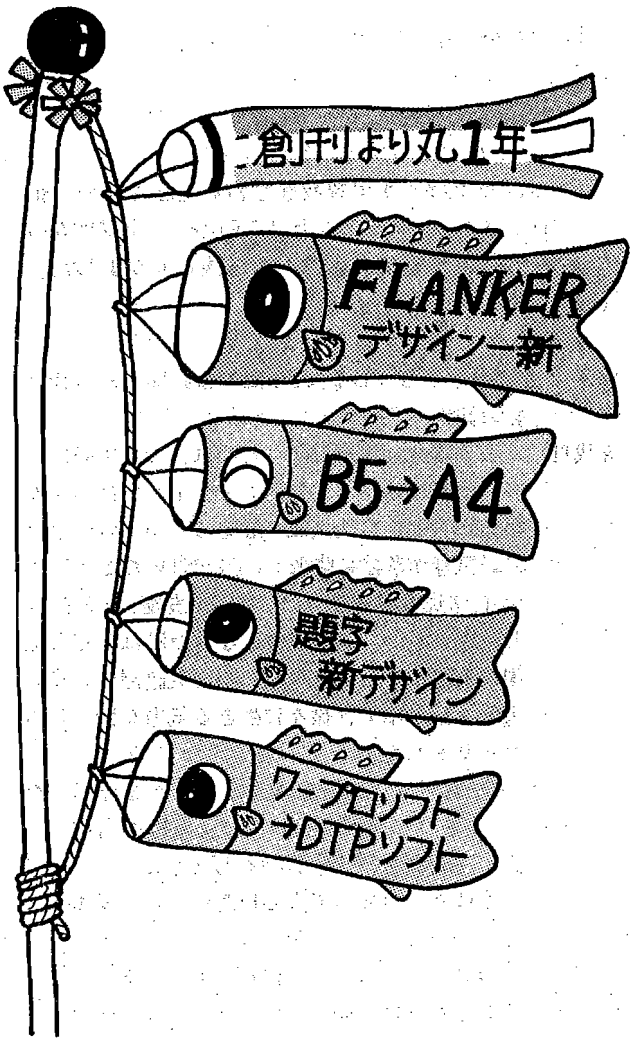
まず、大きさをB5サイズからA4サイズに変更しました。これは、国際的に用紙規格がAサイズに統一される流れを受けての変更です。

また、題字デザインを、表紙絵を作成されている鈴木純子さんに新しくデザインしていただきました。ご本人の表紙絵のイメージにあった題字にすることによって、より表紙絵が引き立つのではないかと思います。また、今まで題字を提供してくださった藤原隆文さん（ad.ぴのきお）には、今回の題字変更を快く了承していただき、大変感謝しております。

３つめは、編集をMacのDTPソフトで行うようになったことです。今までのワープロソフトより自由な編集が可能で、サイズが大きくなったこともあって、より幅広い編集で、読み易い機関紙を作っていきたいと思っております。

内容も、今まで以上に充実したものをお届けできるよう努力していく所存です。新しい機関紙に対するご意見、ご感想などをお待ちしております。

編集部



シンポジウム報告

《　今、アクティブに！　ノーマライゼーションへの道　》

1993年3月7日、午後1時30分より大阪YMCA国際文化センターに於いて、プロップ・ステーション主催、大阪YMCA国際文化センター共催、朝日新聞大阪厚生文化事業団後援によるシンポジウム《今、アクティブに！　ノーマライゼーションへの道》を開催いたしました。

今年2月に重度障害を持ちながら教職への復職を果たした『曽我部教子さん』と、同様の障害を持つ『定藤丈弘さん』との対談をメインに、教育と就労に於けるノーマライゼーションについて、多くの皆様と考えたいと思い企画したものです。

シンポジウムの内容は対談とパネルディスカッションで、以下のメンバーで進行されました。

対談
　曽我部教子さん（尼崎市立若草中学校教諭）
　定藤丈弘さん（大阪府立大学社会福祉学部教授）

パネル・ディスカッション
　曽我部教子さん・定藤丈弘さん
　井殿恵二さん（曽我部教子さんを支援する会事務局長）
　坂上正司（大阪頚髄損傷者連絡会相談役、ﾌﾟﾛｯﾌﾟ・ｽﾃｰｼｮﾝ役員）

司会　竹中ナミ（ﾌﾟﾛｯﾌﾟ・ｽﾃｰｼｮﾝ代表）

シンポジウムは、まず曽我部さんと定藤さんのご紹介、プロップ・ステーション及び今回のシンポジウムの流れの説明があった後、お二人の対談に入りました。（以下、敬称略）

竹　中：　事故から今日まで3年間の曽我部さんの経過をお聞かせ下さい。

曽我部：　私が事故に遭遇しましたのは、1989年8月7日の事でアフリカ・ケニアのマサイ・マラ国立動物保護区上空を熱気球で展望していた時の事です。気球が着陸に失敗し、気が付いたときにはナイロビの病院にいました。頚髄3番を損傷し、首から下の完全麻痺となった私はすぐに帰国する事はできずスワヒリ語と英語だけの長い入院生活の中で、徐々に生きる気力を無くしつつありました。

2ヶ月後に人工呼吸器を着けたまま帰国した後、4ヶ月間関西労災病院（兵庫県尼崎市）で人工呼吸器をはずす訓練をしました。

やはり、自分の障害の程度について認識したときのショックが一番大きかったですね。

復職の希望は、私がICU（集中治療室）にいるときから持ち続けていました。退院後の生活に対しては、施設へは入らず地域での生活を希求していましたが、私はずっと独身で生きていたため、介護や経済的問題などボランティアを求めて大学へ行ったり、ビラを配ったりしました。卒業生や、PTA、同僚教員などで創って下さった《支援の会》の方々による会合もたびたび行いました。

病院の理解もあり、昨年の9月5日に念願がかない、マンションに入居する事ができました。私は、99%不可能だといわれても残る1%の希望に賭けてみたかったのです。

12月はじめ、復職願いを学校長に届けました。そして今年2月5日に条件つきで復職認可がおりました。《支援の会》の方々の精神的かつ物理的な励ましに感謝しております。

退院後2回の研修授業を経験し、教育というものの手ごたえを感じました。

2月8日には復職がかない、現在午前9時から午後4時30分まで研修に通っております。

定　藤：　家族や周りの人々の支援によって（重度障害者の）地域での生活が可能になったという事には意味があると思います。現職復帰という事に関して、日本の現実は10年くらい前から徐々に改善されてきたとはいえ、（曽我部さんが）重度障害の方である事を考えますと、これは大きなニュースであると思います。

私は先生の《自立の意識》、《教壇復帰のへの思い》の情熱に打たれました。《教壇に戻りたい》という事を自分自身の生きる支えとして来られた意志の強さを感じます。援助の輪が広がっていったという事も先生のお人柄によるものだと思います。

曽我部：　私は健康なときから、でもしか教師であった自分を『生徒によって教師にしてもらった』と思っています。心を開いて成長を見せてくれる生徒達が私を教師にしてくれたのです。そして私は教師という仕事に誇りを持つ事ができたのです。私はこの思いを命ある限り生徒達に返していきたいと思っています。

私は自分自身で考え作ったプリントで教育をしてきました。研修期間の今日この頃は、じっくり教科書を読んでいます。実際、教科書をこれだけ見たのは初めてです(^_^)。これからも、事あるごとに仕事（研修授業）を作ってもらい尼崎市教育委員会や他の教員達の見学を求めていこうと考えています。そして、そのための努力を欠かさないようにしております。

竹　中：　これから曽我部さんが越えていかなければならない壁がいろいろとあると思うんですが？

定　藤：　私は16年位前に（1976年12月）交通事故にあいまして、翌年10月1日に職場復帰いたしました。頚髄損傷という事では、基本的に曽我部先生と同じ障害です。私の場合、肺活量は通常の1／3になってしまいましたが、この15年間1度も病気をした事がありません。自分なりに健康管理はしていますが、その人その人の障害に対して、《スタミナ》がついてくるのだと思います。事故の前に体が丈夫であったかどうかが、事故後の健康維持によるスタミナ・アップにつながるのだと思います。あとは基本的に受け入れ体制の問題でしょうね。建物の改造、設備の充実などですね。例えば、2階にあった研究室を1階に移すとか、スロープを造るといった具合に…。（曽我部先生の場合は）プリントを資料にして話す講義形態の充実やスタミナをつけるため、授業の数をこなしていくといった事でしょうね。

曽我部：　外国では、自立している障害者が多いそうですね。

定　藤：　私は以前、アメリカ合衆国のカリフォルニア州立大学バークレイ校(U.C.Berkley)に留学していましたが、向こうでは重度障害者の社会復帰というのは当たり前の事なんですね。

例えば、アメリカの障害者運動のリーダーの一人であるエド・ロバーツ(Edward Roberts)さんという方は四肢麻痺で、たった5分間呼吸器を離すと生きていられない状況にある方ですが、呼吸器を着けながら社会復帰をされています。私は彼とお会いしたのですが、自分の家に戻られるとすぐに自動的に酸素が供給され、減圧によって胸郭を開いて肺を動かす、いわゆる《鉄の肺》の中に入って、その中で生活していました。

U.C.Berkleyには重度障害者のための寮もあるんですよ。

アメリカには（身障者に）人的配慮を義務づける法律があるんですよ。例として、ペンシルバニア州で全盲の人が訴訟を起こし、州が敗訴し、公的介護者がついたといったケースもあります。アメリカは訴訟の多い国なんですが、このことが逆に（身障者の）社会復帰の道につながる事もあります。

これからは、日本という国に対して《アメリカ的機会平等》のシステムを前に押し出していくべきでしょうね。

曽我部：　（日本の）教育制度では、公的費用ではたとえ重度障害者であっても介助者をつけることは難しいようですね。

定　藤：　そうですね。まだ日本では前例がありませんね。

これはU.C.Berkleyでの話ですが、生物物理学専攻の全盲の学生が《トウモロコシの根の成長の研究》を希望したのです。それは、視力をもつ人にとっても大変な視覚作業を要するものです。しかし、（カリフォルニア州バークレイ）市は、必ず（学生も含め）公的な補助人をつけます。彼の場合、労働補助者と実験補助者が公的につきました。こういう配慮はイコール《人間の可能性の追求》であり、日本ではこれからの課題になるでしょうね。

しかし、日本でもそういう例があるんですよ。山形大学医学部の生徒だった方の話ですが、彼は在学中に頚損になり最初は自費で介助をつけていました。卒業後、国家試験にパスされ、今では患者さん達に信望のある精神科の医師になっておられます。

竹　中：　頚髄損傷という障害名が何度か出てきましたが、この障害について少し説明していただけますか？

曽我部：　頚髄というものは、背骨（脊髄）の中で脳に近い方の部分のことを言います。哺乳類の場合それは7つあり、脳に近い方から1番（C1）、2番（C2）…と呼びます。損傷した場合、その番号の若い骨ほど重い障害が残ります。例えば、4番損傷の場合は全身麻痺、3番ならば生存する事が困難な状態になったり、人工呼吸器をつける事になってしまいます。1番、2番の場合は、ほぼ即死状態ですね。（編集者注：損傷部位については脊髄（頚髄）そのものの損傷部位を示す場合と脊髄節（頚髄節）の損傷を示す場合がある。脊髄節とは脊髄と脊髄の間を構成する部分を示し、例えば第4頚髄節というのは第3頚髄と第4頚髄の間を意味する。ほとんどの脊髄損傷の場合は脱臼（あるいは亜脱臼）骨折になるので脊髄節の損傷を表す場合が多い。）

（以上、対談　以下、シンポジウム）

竹　中：　ありがとうございました。

時間ですのでこれで対談を終え、パネル・ディスカッションに移りたいと思います。

パネラーの井殿さんと坂上さんをご紹介しましょう。

井殿さんは《曽我部教子さんを支援する会》の事務局長でいらっしゃいますが、自己紹介と会の活動経過などをお話ください。

井　殿：　当時私は曽我部先生と同じ職場で勤務しており、最初（アフリカへも）一緒に行く予定でした。1989年に事故の電話を受け先生の状況を知り、帰国のために特別機のチャーター便の費用が緊急に必要という事でカンパ活動を始めました。同年9月13日に帰国されたのですが、ICU（集中治療室）に入っておられるときに『家族の壁』というものをひしひしと感じました。

先生は当時、気管を切開されて人工呼吸器を着けておられたため最初の面接の時は話される言葉を聞き取る事さえ困難でした。私が、初めて認識できた言葉は「教師がやれるかな？」という一言でした。

先生をどのように支援するかという事を考えた場合、とりあえずはお金からと思い、カンパ活動を続けました。また、話される言葉が理解できない故に面会に行くたびにいたたまれない感情を持ち、帰る時にはいつも心が暗くなったものです。私は先生にワープロをお勧めしました。

12月7日700通の支援願いを発送しました。そして、卒業生を集め河原で（支援のための）バーベキューパーティーを開催したおり、生徒達から「先生を頼みます」といわれました。このとき《支援の会》から曽我部さんに唇で入力するワープロをプレゼントする事ができました。そして引き続き、訴訟のための資金を集めました。

「復職が気になっていたが、思い通りにならなかった」曽我部先生の自立を支えたのは、生徒達の御家族からの厚い御支援の賜だと思っております。

竹　中：　プロップ・ステーションでは、身障者の方が仕事を得る手段の一つとして、コンピュータ・セミナーを開催しています。

坂上さんからコンピュータ・ユーザとして、またプロップ役員として、同じ障害を持つ曽我部さんに何かアドバイスはありませんか？

坂　上：　僕は「身障者支援＝コンピュータ」とは思いたくはありませんが、確かに便利なものです。

僕はパソコン通信を通じてプロップの設立に関わるようになり、曽我部先生も又パソコン通信で知りました。そして、2年前に初めてお会いした訳です。そして出身校で《自立を支援す

る会》を開いて以来、曽我部先生の講演などがある度に僕も引っ張り出されると云うはめになってしまいました。(^_^)

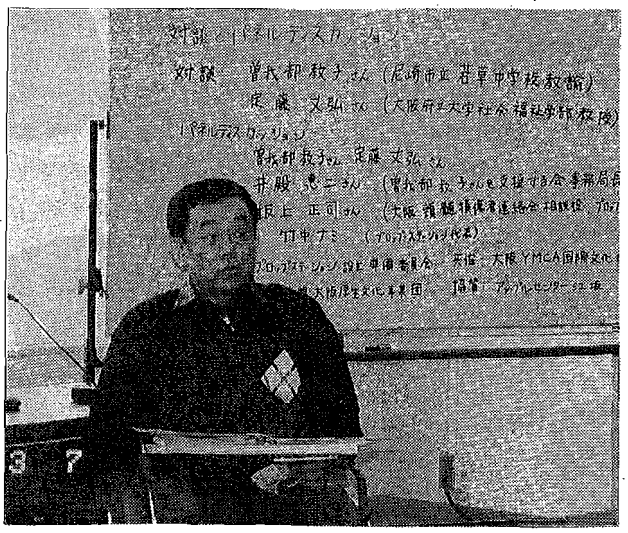
コンピューターは確かに全てではないですが、うまく使えば障害者もハンディ無しにコミュニケーションをとっていく事ができます。

現在、一般企業の営業でのプレゼンテーションの為にコンピュータの導入が拡大されたり、コンピュータを使ったプレゼンテーションを制作する会社などもできてきています。現在私達がセミナーで使っているApple社のMacintoshというパソコンではビデオ画像や音声、効果音やアニメーションなどを用いたプレゼンテーションを比較的簡単に作ることができます。

また、Apple社などのアメリカの企業はリハビリテーション法やアメリカ障害者法によって障害者用のサポート機器を作ることが半ば義務づけられているため、様々な種類のサポート機器が出回っています。日本でも、新しくプロップのセミナーに加わっていただいたNEC社を中心に最近多くのサポート機器が出回るようになってきました。これらのソフトやサポート機器を用いてコンピュータを身近な道具とすることで曽我部先生が授業をすることが可能になると思います。

こういうソフトを使って模擬授業をしている小学校もあります。生徒への教育的効果も大きいと思います。

曽我部： 私はもともとパソコンといったものは大嫌いな人間でした。私はこれまで、教科書よりも自分自身で作ったプリントによる授業をしてきましたので、プリントを作れるかどうかが自分に取っての死活問題となるのです。現在、私は井殿先生から頂いた98シリーズのパソコンを編棒の先にゴムを着けてキーボードを打って使っています。この時は、体を直角に起こして唇で作業しなければなりませんので、もっと楽にもっと楽しく仕事ができるものを探しております。



竹　中： アメリカでは、障害者用インターフェースを多くだしているという事です。リハビリテーション工学が充実していて、個人々々に合わせたものを作っているそうですね。

定　藤： バークレイ大学の生徒でしたが、彼は進行性筋萎縮症で公的に提供された音声入力コンピューターを使っていましたね。

坂　上： 機器によるサポートと人的介助がバランスよく提供されればいいんですが。

僕が大学2年のとき、理学部必修の実験授業を受けることになり、大学側は私専用の車いすでも使える実験机と実験助手（当時博士課程の学生）を付けてくれました。プログラムも実験器具も若干違うものを用意してもらいました。しかし、他の学生が2人1組で実験をする中、クラスの皆と少し離れたところで実験をすることになり、僕だけが何か違うことをやっている人いるように思われていたのではないかと思います。だから、３年の実験では話し合って、僕も皆と同じカリキュラムを同じペースで学生と2人1組でやることにしました。もちろん、サポートの助手の方も付きましたが、殆どの事をことをペアの学生とこなし、どうしても2人でやらなければならない部分などを上手にサポートしてもらいました。そんなことから、やはり僕は《目立たないようにサポート》をしてくれる人間の必要性を感じます。

竹　中： このシンポジウムを開催するにあたっていろいろとご相談をさせていただいた国立特殊教育総合研究所の成田滋先生から「曽我部先生にあったサポート機器を共に研究し開発していきましょう。どんな協力も惜しみません」という御申し出がありました。

曽我部さん、教材作りにコンピュータの導入はいかがですか？

曽我部： それは是非ともチャレンジさせて頂きたいですね。

坂　上： 僕の毎日の生活にはコンピュータが欠かせないものになっていますが、成田先生の研究所では国内外のMacintoshに対応したあらゆるサポート機器が揃っていると言うことです。全身麻痺の人には音声や呼気を使って入力する装置もあります。プロップには高いレベルの技術者さん達がボランタリーに関わってくださってますので、曽我部さんのチャレンジ精神に応えることも可能だと思います。

竹　中：　曽我部さんが受傷後に行われた実験授業についてお話願いますか。

曽我部：　1つめは飛び入りで小学校4年生の1時間の授業でした。授業内容は理科で《電気》についてでした。プリントや実験材料の配布、その他色々な不安を持ったまま、ほとんど何の打ち合わせも無しに行いましたが、担任の先生の御援助のおかげで無事終了する事が出来ました。久しぶりの教壇の上で、私は『こういう幸せな事』があったのだという事を改めて感じました。

2つめは12月5日で、中学校の授業だったのですが、翌年2月6日に休職期間の期限が切迫していたため「これが私の最後の授業」だ、という気持ちを強く抱いて教壇に立ちました。しかし授業が進行するにつれ『生きている子供達に向かっている』という意識がだんだんと大きくなり、逆に「最後の授業」という意識は徐々に薄れていきました。授業が終わる頃には『これを最後にしたくない！』という想いが強くなりました。私はこの時本当に心の底から、《教職は私にとって天職である》と深く感じました。

井　殿：　私は、曽我部先生の授業は、決して《上手に教え上手に学ぶ》ような授業ではないと思います。《一生懸命教え、子供が想像以上の事を学んで行く》、これが曽我部先生の授業であるという気がします。最初、御自身「無理なのではないか?!」と懸念されていた先生を教壇に引っ張り出したのは子供達であったと思います。今まで曽我部先生がやってこられた個性あるユニークな授業を続けて頂きたいという事も私達《支援の会》の願いの一つです。

定　藤：　曽我部先生の復職勝ち取りの意味とその大きさを感じますが、本当の意味での復職は、教壇復帰をしなければその意味は半減すると思います。これからは、段階的ステップを具体的に次々と踏んで行って頂きたい。そして、教壇復帰を完全なものにして頂きたい。そうされる事により、その意味はもっともっと大きくなるでしょう。先生が、不安に思っておられる生徒への気遣いなどの必要性は感じません。理科の授業での実験補助などは、生徒がどんな風に授業に参加するかと云う事に関わっているのです。子供はすぐに慣れます。障害は、決してハンディではなく、問題は《やる気・情熱》です。先生と生徒、相互の啓発により学習効果が現れるのだと私は思います。

教育に関する曽我部先生の哲学に感じ入りました。そのためにPTAからの支援があったのだと思います。重度障害者に対する社会の受け入れは、まだまだステレオ・タイプ的でありますし、これを打破するためにも是非頑張って頂きたいと思います。

坂　上：　理学部の学生から見てもおもしろいと思える曽我部先生の授業に期待します。是非、もう1度お願いします。

曽我部：　事故に遭遇して以来、私が望んだ事が次々と実現していると思います。1つめは人工呼吸器の取り外し、2つめは切開した気管を閉じる事、3つめは地域に出て生活する事、そして復職、現場復帰。支援の人々に対して深く感謝いたします。現在『これが生きている事かな』という思いで一杯です。今後は気負う事無く頭をフルに回転させて1日も早く現場に出たいと思っております。その為の良い知恵など有りましたら是非教えて下さい。

今日はどうもありがとうございました。

竹　中：　シンポジストの皆様、会場の様、本日は本当にありがとうございました。　曽我部先生の復職はゴールではなくスタートなのだと思います。定藤先生が言われたように、日本のノーマライゼーションにとって大きなエポックである「曽我部先生の復職」を、本当の復職「教壇復帰」つなげるために今日のシンポジウムが役立つなら、こんなに嬉しいことはありません。これから曽我部先生が歩まれる人生の節目節目で、こうした会を開催し続けて行きたいと思います。

今日は皆様、本当にありがとうございました。

（書記：米谷、松村、西村、編集：竹中、坂上）

シンポジウムに参加して

東京都神経科学総合研究所　松井和子

北九州市の向坊弘道氏の提案で、移動の困難な頚髄損傷者（以下、頚損者と略す）の交流の場“はがき通信”を始めて3年になる。この間、復学、進学一人暮らし、著書の出版、結婚、復職など頚損者の生活も大きな変化を見せてきた。その中でも曽我部さんの復職は私にとって新鮮な驚きであった。

その驚きは、曽我部さんの復職が介助者付きや実験を伴う理科の先生ということだけではない。曽我部さんには支援の会が結成されていて、その会が復職に一役買っているらしく、そのことも私の関心をそそった。

曽我部さんのように重い障害を持った人を元の仲間として職場復帰を呼びかけ、支援する、そうした人々を動かす曽我部さんとはどういう人だろかと考えていたある日、突然、今回のシンポジウムの参加を呼びかけるFAXが届いた。

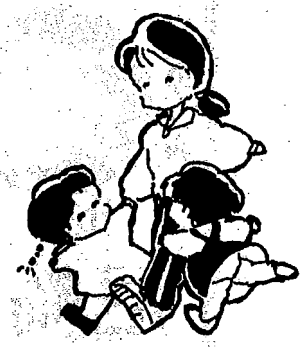
参加した感想は、1時間半という短時間の割には、司会の巧みさもあって曽我部さんの復職の経過や背景などのポイントがよく掴めたし、曽我部さんと定藤丈弘氏の対談からも貴重な情報が得られた。その中で“今回の復職はワンステップであって教壇復帰ではない、目標は曽我部さんが教壇に立つこと、これから曽我部さんが教壇に立てるまで注目していく”という発言は正論ではあるが、私には一抹の不安を感じさせた。

“復職は介助付きの出勤が条件だが、介助者の費用は自己負担、外国ではどうなっているか”という質問や“復職の希望は出したが、許可されるとは思っていなかった。実際に許可されてうろたえた”、“事故以来、頑張って、頑張ってと何度聞かされたことか、頑張ってと言われるほど厭なことはない”と率直に言われる曽我部さんに教壇復帰の目標が重荷にならないようにと、曽我部さんと同年代で働くものとして願わずにいられないような気持ちになった。

一緒に参加したSさんも上司や同僚の熱心な勧めで復職したが、「けがする前から携わっていた仕事ですから、あせりを感じ始めるときりがありません。こなせる仕事量、ペースは雲泥の差です。“いらだたしさ、もどかしさ”はもう気負いなのです」と手紙に書いてくる。また、T大神経内科の若いドクターは“もちろん無給ですが”と最近“復職”した知らせをはがき通信に寄せてきた。曽我部さんほど重度でなくても、頚損者の復職は少しづつ増えてきている。

曽我部さんのような重度のの障害を持つ人達が、スピードや効率が最優先の職場に適応するのではなく、職場や労働条件が曽我部さんたち復職者を受け入れられように労働問題として取り組んでいければ、私たち（健常者）の働く環境も現在より数段改善されてくるのではないだろうか。

シンポジウムの参加者に意外なほど健常者が多かったことから、曽我部先生の復職が重度の障害を持つ人々にも健常者にとっても働きやすい職場作りにつながってほしいと切実に思った。



まとめ

曽我部さんと知り会ってもう2年近くになります。その間に、驚くような思い切った決断をされるときもあれば、ちょっとしたことで悩んでられたこともありました。この人は本当に中途障害者なのかと思うくらい障害を受容しているかと思えば、その逆のこともありました。しかし、長い目で見ると、曽我部さん御自身が言われているように、彼女の「願い」をひとつづつ確実に実現させています。ある程度歳をとってから障害を負うと、どうしてもそれまで持っていた健常者の価値観から抜け出せないものですが、曽我部さんの場合は逆にその人生経験を活かした生き方をされているようです。

今、そんな曽我部さんが自信をもって教壇復帰へ臨んでおられます。そして、一方で松井さんが言われるような過酷な労働条件が立ちふさがっています。曽我部さんが、その過酷な労働環境で無理をして働くのではなく、曽我部さんが働けるような労働環境をつくっていくこと、この考え方こそがシンポジウムの標題に掲げられた“ノーマライゼーション”なのです。

現状の労働環境は、障害者どころか健常者にとっても過酷なものですが、物差を健常者を越えたところから障害者の方へ少しでも近付けることによって、曽我部さんを含め全ての重度障害者が不安なく働ける職場が増えていくことを願います。　（坂上）

PROP PRESS

障害乗り越えシンポ

重度障害を乗り越えて二月に復職した尼崎市立中学校教諭の曽我部教子さん(四九)と、車いすで教鞭(きょうべん)を取る定藤丈弘・大阪府立大教授(五〇)が対談するシンポジウム「今、アクティブに！ノーマライゼーションへの道」(朝日新聞大阪厚生文化事業団後援)が七日、大阪市西区土佐堀一丁目の大阪YMCA国際文化センターで催される。

曽我部教子さん

定藤丈弘教授

尼崎の曽我部教諭 定藤・大阪府大教授

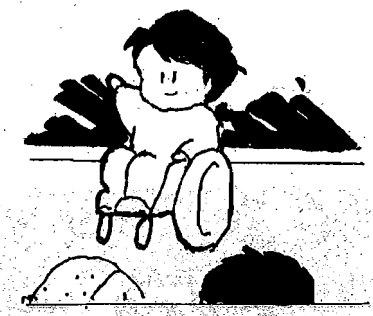
きょう大阪で対談

互いの経験や復職への経過

曽我部さんは三年半前、旅行中に乗った熱気球の事故で首から下がまひ状態になった。しかし、一日五時間以内の就労▽介護者の同伴――の条件付きで「復職は可能」とする医師の診断書を添えて復職願を市教委に提出。今は教壇復帰を目指して研修に取り組んでいる。定藤教授は十六年前に交通事故で首の骨を損傷し、車いす生活になった。

シンポジウムは、障害者の雇用促進を支援する市民団体「プロップ・ステーション」(本部・大阪市北区、竹中ナミ代表)が企画。第一部で、二人が互いの経験などを対談。第二部で、曽我部さんを支えてきた教師仲間たちも加わり、復職への経過などを話し合う。

午後一時半―三時、同センター九階で。入場料五百円。問い合わせはプロップ・ステーション(〇六・八八一・〇〇四一)へ。



朝日新聞

公費の介護者制度の必要性提言

重度障害の先生ら大阪でシンポ

復職 画期的なこと

曽我部教諭と定藤教授

「復職は画期的なこと。教壇にも必ず復帰できる」――。首から下がまひ状態という最重度の障害を克服して二月に復職した尼崎市立中教諭の曽我部教子さん(四)に、車いすで学生に教える定藤丈弘・大阪府立大教授(五)が熱いエールを送った。二人の対談を中心としたシンポジウム「今、アクティブにノーマライゼーションへの道」が七日、大阪市西区土佐堀二丁目の大阪YMCA国際文化センターで催された。関西や関東各地から教師や福祉関係者ら約六十人が出席し、障害者の社会復帰について話し合った。

シンポジウムは障害者の就労を支援する市民団体「プロップ・ステーション」(竹中ナミ代表)が企画。第一部の二人の対談は、竹中代表が司会した。

最初に、曽我部さんが一目指している現状も説明した。「生徒たちが教師としての私を育ててくれました。また教壇に戻りたいと九八九年八月にアフリカ旅行で乗った熱気球が着地に失敗し、頸髄(けいずい)を損傷した経過や、その後のリハビリの苦しさ、復職の喜びを話した。

現在は尼崎市内の教育センターに通って教材研究に取り組み、教室への復帰を

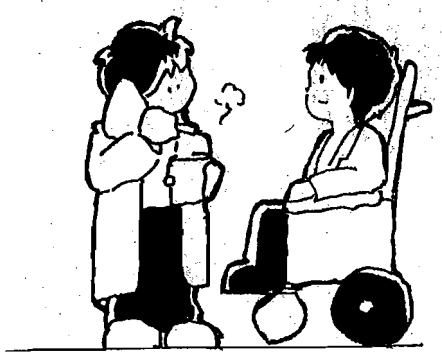
これに対し、定藤教授は「日本の現状では画期的なことだ。教育の問題だけでなく、障害者の雇用の点からもすばらしい」と評価したが、「教壇復帰がなければ、復職の意味は半減する」とも述べ、本格復帰を強く期待した。

さらに、米国の例を挙げて「人工呼吸器をつけた、曽我部さんよりさらに重い障害のある人が、当たり前のように社会復帰を果たしている。基本的には学校などを受け入れ側の問題だ」とし、公費による介護者制度の必要性を提言した。

定藤教授も七六年十二月に交通事故で頸髄を損傷。車いす生活を余儀なくされたが、翌年十月には大学に復職し、現在は社会福祉学の講義やゼミを担当している。

第二部では、曽我部さんを三年半支えてきた教師仲間や生徒の母親らでつくる「曽我部さんを支援する会」のメンバーら二人が加わり、支援活動の歩みなどを振り返った。この中で、音声で入力するコンピューターなど曽我部さんが教壇復帰の際に活用できる機器の話題も取り上げられた。

シンポジウム参加者の一人で、奈良市の民間福祉施設「たんぽぽの家」スタッフの成田修さん(三)は「障害のため本人が自由に動けないことが、周囲の人に対してはかえってプラスに働くということを再認識した」と話していた。

教職復職や障害者の社会参加などについて話し合う曽我部さんと定藤教授ら ＝大阪市西区土佐堀1丁目で

基本的に学校など受け入れ側の問題